

+1(プラスワン)



「岩手、言わせて」

牧師 横山順一

九十九回の今夏の高校野球、準々決勝で、優勝した埼玉の花咲徳栄に敗れた盛岡大学付属高校。その設立経緯をよく知らないが、関係学校として、教団年鑑にも記載されている学校だ。なのにキリスト教主義とは知らない人も多いのではないか（失礼ながら）。

ただし岩手県代表として甲子園常連の強豪校としてはよく知られている。

二〇〇八年に現監督の関口さんにバトンタッチされてから、少しずつ頭角を現し、今年はついにベスト8まで来た。

けれども、ここに至るまでは長い道のりだった。前監督だった沢田真一さんが「甲子園の負け方、教えます」という本を書いて、話題となっている。

彼が監督として春夏合わせて七度出場したすべて、一回戦で敗退したのだ。

もちろん、野球そのものは選手たちによる。しかし率いる監督が、

「舞い上がって」しまったり、「よそゆき」を着てしまったり、その影響は計り知れないだろう。

どこの学校でも戦前、「自分たちの野球ができれば」と意気込みを語る。いつもどおり、普段のプレーができたなら、勝機はあるのだ。だが、その「普段どおり」が難しい。緊張や高揚やプレッシャーのあまり、舞い上がり、ついよそ行きに陥ってしまうのか。

勝ち方には「これ」という定石などないが、負け方には、納得させられる理由がある。沢田さんの述懐は、正直で深い。

野球とは何ら関係ないが、岩手、盛岡と聞くと、詩人・石川啄木がまず浮かぶ。続いて啄木の盛岡中学の十年後輩となる宮沢賢治。

東神戸教会の初代牧師だった三浦清一牧師のお連れ合いは、啄木の実妹・光子さんである。

二人は福岡で出会ったが、光子さんに聖書を贈ったのは兄・啄木だ。兄は、肺結核で二十六歳で召された。その妻・節子さんも、二人の娘もみんな結核で早くに亡くなった。貧しい時代でもあった。

「一握の砂」に結集された、「岩手」「盛岡」の持つ、一筋の何かを感じてならない。

「雨ニモ負ケズ・・・」と綴った宮沢賢治にも、また。この世的な「成功」や「勝利」ではなく、かえって「負け」の中に隠された真理や真実の掘り起こしのような。或いは、都会に一線を引く地方魂のような。

その意味で、イエスこそ元祖だ。故郷ガリラヤは、都エルサレムから見れば、東京に対する東北・岩手と称して良いだろう。

十字架の出来事は、敗北でしかなかった。でも、その敗北に込められた意味があった。

最近の高校野球は、「打撃」だ。ガンガン打って勝つ。投手が複数必要にもなる。その点、冬季の練習場を持つていない盛岡大学付属高は、不利な条件下にある。

来年は百回の節目を迎える夏の甲子園。密かに盛岡大付属の健闘を祈りつつ、さて私たちは、敗北に込められた意味を探りながら、秋の信仰生活に向いたい。